

絵本から始まる保育

－自分が選んだ旬の絵本を通して広がっていった遊びの実践報告－

境川保育園 佐土原 愛

1. はじめに

学生時代、保育を学んでいる時は絵本は見るもの・読むものと感じるが多かった。保育士となり、3年間働く中で一冊の絵本から子どもたちの遊びが広がっていくことを知った。今年度は、4年目で3歳児の担任となったので、子どもたちの遊びの中で自分の選んだ「旬」の絵本を活用することで、子どもたちの遊びが広がっていった保育実践を報告する。

(1) 【R4 4月】『ぼく、だんごむし』

戸外遊びの園庭では、ダンゴムシ探しに夢中になっている子どもが多い。自分で探すことが出来る子どももいれば、「先生、ダンゴムシ見つけて」「どこにいるの?」と声をかけてくる子どももいた。

そこで、タイムリーな旬の絵本『ぼく、だんごむし』を読んでみた。絵本で、ダンゴムシはどんな場所にいるのか、何を食べているのかなど知ることで「見つけて、見つけて」と言っていた子どもも「この植木鉢の下にいるかも!」「葉っぱを食べるから葉っぱがいっぱいあるところを探してみる」とダンゴムシを探すコツに繋がったり、自分で探して見つけたダンゴムシを手のにのせてダンゴムシの生態に気づいたりするようにもなった。観察したダンゴムシの絵を描く子どもも出てきた。保育士が「ダンゴムシを作ってみる?」と声をかけると子どもたちも「作ってみたい」「作ってみたい」と製作が始まった。「ダンゴムシの背中には線が入っていたよ」「足は細かったよ」等々気が付いたことを口にしながら、ダンゴムシの製作がはじまった。子どもたちが気づいたことが生かせる材料を保育士で考えて用意した。それを使って子どもたちがダンゴムシの特徴を捉えて製作することができた。保育士の用意した葉やコンクリートを壁に貼ると「私のダンゴムシは葉っぱが好きだからここに貼りたい」とダンゴムシになった気持ちでのお話も始まっていった。



【ぼく、だんごむしと製作】



【ハサミでの製作】



【絵の具を使った製作】

(2) 【R4 5月】『たべもの』(図鑑)

5月に入り、クラスで枝豆を育てることにした。図鑑を子どもたちの手に届くところに置いてみた。枝豆は、普段から家庭で食べているのか「これ食べたことある」「パパが好きで」と知っている子どもも多かった。しかし、種を見たことがある子どもはおらず、保育士が「種はどんな色をしているのかな?」と声をかけると「枝豆は緑だから種も一緒」「私は黒と思う」等と言っていた。種を植えるときは触って匂いを嗅いで興味を持ちながら、一人一つの鉢に植えていった。種植えを終えたころから、図鑑のページをめくる子どもが出てきた。めくりながら「枝豆ってこんな葉っぱが生えるんだね」「枝豆は大豆になって、お豆腐やきな粉にもなるのー!」等自分が育てている枝豆と図鑑を対比することで図鑑の知識を実際に試す発見にもなった。

また、保育士が『えだまめ日記』を作成し、種の植え方や枝豆が育っていく様子、子どもたちの気付きなど日々の様子を掲載・展示することで、「種を植えるときは穴をあけるんでな」「今日、図鑑と一緒にみたいな芽がでていいる」「早く図鑑みたいに大きな枝豆が出来るといいな」など収穫や食へとつながるまで継続的に枝豆の成長に興味関心が高まったままお世話をすることができた。



【図鑑 たべもの】



【栽培活動を記録したえだまめ日記】



【みんなで枝豆を植えたよ】



【枝豆、大きくなあれ!!】

(3) 【R4 6月】『おじさんのかさ』

雨が降る日が多くなってきたので、『おじさんのかさ』を読んでみた。絵本の中に雨の歌が出てきた。「あめがふったらポンポロポン、あめがふったらピッチャンチャン」というフレーズを読むと、リズムを楽しみながら一緒に口ずさむ子どももいれば、「本当にこんな音が鳴るの?」という言葉も聞かれた。「本当に音が鳴るのかみんなでやってみる?」と声をかけると「やってみたい」「楽しそう」と興味津々の子どもたちだった。

小ぶりの日に長靴を履き傘をさして園庭に出てみた。「全然ポンポロロンじゃない」「パラパラって

聞こえる」等の声が多かった。保育士がホースを持ち出して水の強弱を調整してみんなの傘にかけると「ポンポロポンと聞こえた」「ジャージャーと聞こえた」等々の声が聞こえて、子どもたちが傘をさして雨の中で気づいたことをやってみる遊びになった。



【おじさんのかさ】



【どんな音が鳴るのかな？】

(4) 【R4 7月～8月】『そうだそーだ』

7～8月は夏に飲みたくなるメロンソーダの絵本『そうだそーだ』を読んでみた。保育室に絵本を飾っていると子どもたちの中から「飲んでみたい」という声が聞こえてきた。保育士が「作ってみようか？」と声をかけると製作が始まった。紙を用意すると切ったり貼ったりとはさみやのりの道具を使いながらソーダー水ができた。「氷がない」「氷が欲しいなあ」と子どもたちが言うので、保育士が「いいこと思いついた!!」と四角いスポンジと白色のスタンプを準備すると「本当の氷みたい」「いっぱい氷入れたいな」等と氷がいっぱい入ったソーター水が出来上がっていった。

また、園庭で、水を入れた大きな器や絵の具、氷などを準備すると色水遊びが始まった。色水遊びはジュースやさんごっこになり、「メロンソーダを作りたい」とメロンソーダーづくりが始まった。「メロンソーダは緑色だった」「氷も入れて冷たくしてみよう」「上に乗っていたアイスクリームはどうしよう」と言う子どももいた。傍らで保育士が石鹸を泡立てていたら、「それクリームみたい」とクリーム作り方を聞いてきたので子どもたちと一緒にやってみた。「うわー！クリームが出きた」「メロンソーダーになった」「絵本と同じメロンソーダができた」「飲みたいなあ～」「飲んでみたい」と本当に飲みそうだったのでドキドキしたが「乾杯」「乾杯」と乾杯遊びが始まった。



【そうだそーだ】



【メロンソーダを作って乾杯！】



【スタンプで氷を表現】

(5) 【R4年 11月～12月】『いいからいいから』

クラスで「いいからいいから」の絵本の読み聞かせをすると数日、「これ読んで」と催促する子どもたちの声。何日か繰り返し読んでいくと、遊びの中で、雷役と僕役に分かれたり自分たちで配役を決め楽しんでいった。「雷様は何が好きですか?」「私はカレーライスが好きです」「私はバナナが好きです」等々絵本にはない言葉も出てきていた。経験したことやストーリーから遊びを発展させていった。この遊びの延長を劇遊びで発表会に披露することにした。

スモッグや雷のパンツの衣装を着ることでイメージがさらに膨らみ、雷と僕の二役になりきっていた。「いいからいいから」とおもちゃの貸し借りやケンカなどでも笑って許してしまえる「いいからいいから」「いいからいいから」の言葉の言い回しを楽しむ楽しいクラスになっていった。(「あのいいからいいからではちょっと困ります」と担任の心の声。)



【いいからいいから】



【雷さんと僕になりきって劇遊びを楽しむ子どもたち】



2. おわりに

子どもたちの遊びの姿を見て、私が思う「旬」の絵本を選んで、子どもたちに読んでみた。絵本からの子どもたちの気付きや保育士の声掛けがきっかけとなり子どもたちが様々な遊びに広がっていくことを再確認できた。保護者からも「家でも絵本を見る機会が増えた。まだ字を読むことは出来ないが、絵を見ながら自分でストーリーを作っている姿を見て、想像力が育っていて嬉しかった」という声も聞くことができた。

今後も子どもたちの遊びの姿をしっかり見て、発達年齢に合った「旬」の絵本を取り入れながら、子どもたちの発想やつぶやきを丁寧に気づいてあげられる保育士でいたいと思う。さらにどんな遊びに発展するのを見守れる、子どものつぶやきから遊びが広がるような行動や言葉かけやアイデアや環境を考えられる充実した保育が出来る保育士になるように努めていきたいと思った。